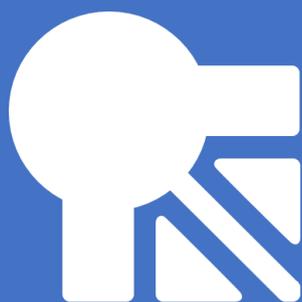


UK x JP  
2016

# 日英の貧困 を探る

## 活動報告書

2016年9月10日～16日 イギリス、ロンドン



日英学生会議  
UK-Japan Student Conference



# 目次 – Contents –

1.	日英学生会議の理念	– Mission of the UK-Japan Student Conference –	3
2.	日英における貧困問題	– Poverty in the UK and Japan –	4
3.	プログラム構成	– Programme Structure –	5
4.	開催要項	– Conference Details –	7
5.	実行委員・参加者名簿	– Organisers and Participants –	9
6.	事前学習	– Prior Learning Sessions –	10
7.	本会議	– Conference Agenda –	12
8.	終わりに	– Epilogue –	17



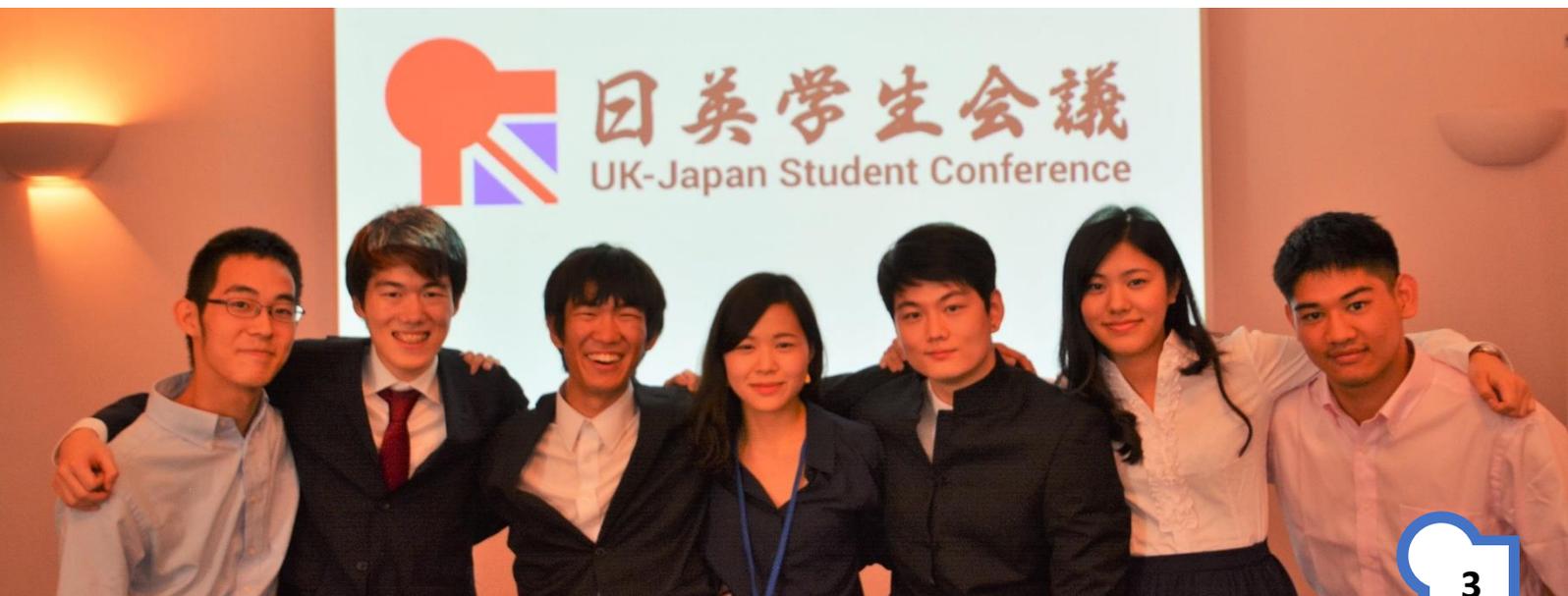
# 日英学生会議の理念

## Mission of the UK-Japan Student Conference

私たちは、日英両国の将来の担い手である学生同士の交流と議論の場をつくることにより、両国学生が社会で活躍する際に礎となる人脈形成を支え、学生の側から日英間の交流を活性化したいと願っています。将来に開けた可能性をもち、利益や地位に依らない交友関係を築くことのできる学生期に得られた絆は、生涯にわたり生きてくる宝です。一期一会の出会いから始まった交友関係がきっかけとなり、人生や価値観に転機が訪れるということもしばしばあります。日英学生会議は、日本やイギリスというそれぞれ内部で完結しがちなコミュニティーをまたぎ、こうした「出会い」を媒介する懸け橋としての役割を担い、双方の学生の人生に大きなインパクトを与える可能性を秘めています。

私たちは、日英という異なるバックグラウンドをもつ学生同士が議論することを通じて、潜在意識に眠る自分の先入観やバイアスを問い、多角的なアプローチに気づく、という体験を重視しています。この体験は、国境を超えた舞台上幅広い視野をもって議論できる個人の形成にとって、かけがえのないものです。私たちは、自由闊達にとことん語り合うというこの風土を、会議期間・会議場内に終わらせず、是非とも学生各人に自国のコミュニティーに持ち帰ってもらい、こうした「気づき」の体験を日英学生会議の外に伝えていきたいと考えています。私たちは、「自由闊達な議論」→「気づき」→「アウトプット」というプロセスのモデルとして、日英学生会議を創設することを志します。

日英学生会議は、日本とイギリスにおける、グローバル志向で政治や社会への関心が高い学生が一所に集う、希少な機会を創出します。日英二大国の将来を担う学生たちが、アイデアを共有し、持続的な社会の実現に向けてのヴィジョンを提言するという営みは、それにより得られる知見においても、次世代のリーダーとしての学生の成長においても、両国の将来にとって貴重なものです。日英両国の学生という、これまでなかった視点を開拓することは、次世代を見据えた政策や取り組みの構想が芽生える土壌となり得ます。この新たな価値を十分に活かすべく、私たちは学生会議の成果を公表し、フィードバックを通じて社会に還元いたします。私たちは、日英学生会議が、日英間の豊かな交流と議論の源泉となることを願っています。



第1回日英学生会議では、日本とイギリスにおける貧困問題に焦点を当て、貧困問題の現状と原因を分析し、どのような対貧困政策や取り組みが有効かを論じました。開発途上国に焦点が当てられがちな貧困問題ですが、開発途上国のみならず、イギリス、さらには日本国内にも深刻な貧困問題が身近に存在します。このような貧困が生み出される社会の構造は、先進国と開発途上国とで一致するものもあれば、文化的背景に起因するもの、さらには先進国特有のものもあります。たとえば、会社や学校に通うには、適切な衣類や雑貨を揃えるだけのある程度の高水準が前提として敷かれているがために、先進国では必要最低限の生活を送るため以上の出費を要求されます。このような、貧困の立場にある人々の視点に立たないと見えてこない、社会に埋め込まれた貧困を助長する様々な要因を可視化することが、先進国における格差がこれ以上増大することを防ぐために重要です。

貧困問題の解決が遅れている原因のひとつに、当事者の声が社会に届きにくいことがあげられます。当事者が貧困者であるが故に社会的地位や人脈、影響力がなかったり、自力で問題解決をするために必要な教育を享受できるほど恵まれていなかったり、たとえば暴力団や風俗業の関連で、当事者のプライバシー上実情を明かせなかったり、と世間に現状理解が浸透しないことによる様々な理由が考えられます。貧困を解決に向かわせるためには、社会に変化を生み出せる人々に、社会の変化を必要としている人々の声を届ける必要があります。この学生会議では、そうした知られざる声や実情について学び、触れ、発信という形で当事者に代わって社会に声を還元することを目指します。

先進国である、福祉国家である、など数多くの共通点をもつ日本とイギリスですが、文化・宗教の特色上、決定的な違いもあります。キリスト教が社会的に影響をもつイギリスでは、政府や個人のみで解決されない数多くの課題が、チャリティー団体によって対処されています。貧困そのものへの見方も日本とイギリスでは異なります。このような相違点こそ、日本とイギリスそれぞれのアプローチの独自性が現れます。このような異なる考え方を両国学生間で共有することが、より幅広いもの見方から貧困問題に挑み、解決のための糸口を見出すきっかけとなることを祈願します。



日英学生会議は、異なるバックグラウンドをもつ両国の学生が多角的なアプローチから意見やアイデアを共有するなかで、幅広い視野をもって思考する力を養成することを目標とします。この過程で自由闊達な議論はきわめて重要です。我々は、参加者全員が積極的に議論に参画し、意見交換や発表を通して、セミナーやワークショップ、実地調査を通して得た学びを発信できる環境づくりに徹しました。

## 事前学習

参加者全員が貧困問題に対する一定の予備知識を持って本会議に臨めるべく、事前学習課題および勉強会を実施しました。貧困に関連するトピックについての理解を深めることで、参加者が積極的に議論に参画し、論理的に自分の意見を構成し、他者の議論を分析する力を養成することが目的です。

事前学習は3部によって構成されます。

### パート A:

貧困問題についての俯瞰的な知見を得るために、関連する一連のトピックについて、論点をさらいます。勉強会にて、参加者は各論点について自分の意見を提示することを求められます。

### パート B:

上記でさらった論点のうち、参加者各自関心を持ったトピックを選び、文献などを参照しつつ、問題の背景や現状の要旨および代表的な論点をまとめます。参加者はトピックがどのような重要性を持ち、どのアクターに影響を及ぼし、どのように社会の現状を反映しているのかを論じ、問題解決のための指針として考えられることを提示します。

### パート C:

具体的な事例やルポについてケーススタディを行います。問題の背景を具体的に調査し、原因と理由を分析したうえで、問題解決のための指針として考えられることを議論します。

## セミナー

貧困問題の研究を専門とする大学の教授らによるセミナーは、この会議における貴重なインプット源のひとつです。セミナーでは、貧困問題を論ずる際に議論の礎となる概念や発想、知識のコアを提供します。今回の会議では、Dr Daniel Kilburn, Dr Neil Lee および Oxfam を代表して Ms Carla Violante が、それぞれ独自の切り口から貧困問題に対する専門的な知識や経験を伝授してくださりました。講義の後には、講義のなかで提示された観点や議論に対する意見を参加者間で共有し、それが日英両国の貧困解決という大きな枠組みの中にどのような形で組み込まれるかを議論しました。

## フィールドワーク

フィールドワークは、我々が議論する貧困を現実問題として、参加者が直接的な体験として実感する

機会です。具体的な貧困地域を実際に訪れ、地元の人々へのインタビューを通して、数字のみからは見えてこない貧困問題の背景と現状を理解します。地域によっては、そこに貧困問題が存在することはそこまで明らかではありませんが、地元の人々と話すことによって、表面には現れない裏事情がより明らかになります。この実地調査は、あとに行うアイデアコンテストにおいて発想の素材としての役割も持ちます。

## ワークショップ

ワークショップは、参加者が主体的に自分のアイデアを提示し、データ解析や調査をグループ活動として行うインタラクティブなセッションとしての役割を持ちます。これは小グループによるディスカッションとは異なるフォーマットで行われ、今回の会議においてはマップ・エクササイズとアイデアコンテストが該当します。

マップ・エクササイズは、参加者に地図をもとにしたデータ解析のツールを提供する目的で実施しました。オンラインで公開されているデータベースより、地域の歴史的変遷や住宅や住民に関する統計的情報が地図情報としてアクセス可能です。ワークショップ後にも、参加者はプレゼンテーションのための予備調査においても地図データを活用することができます。

アイデアコンテストは、フィールドワークとマップ・エクササイズの学習を総合的に活用し、地域ベースの解決策提示に重点を置いたアイデアのピッチアクティビティです。

## 文化交流会

日英学生会議が学术交流のみならず、一週間を通しての参加者同士の深い相互理解の場であることに私たちはこの会議に固有の価値を見出します。長期にわたる友情関係を築くうえで、相互文化体験を通して相手の文化的背景を学び、楽しむことはとても貴重です。この会議では、伝統文化のエンタテインメントならびにカラオケ会・パブ会を企画しました。

## プレゼンテーション

プレゼンテーションはこの会議を通じた学習体験のコアを形成します。発表の場にて、参加者各々は会議を通しての学習を意識的に咀嚼し、主要な論点と解決の指針を引き出すことを挑戦されます。

導入プレゼンテーションは、参加者各々の国の貧困問題について俯瞰的な論点を提示します。このプレゼンは、貧困問題についての一定の知識を有しつつも、その国固有の貧困問題とその社会的・文化的背景には通じていない相手国の参加者に向けられたものです。最終プレゼンテーションは両国の貧困問題の現状と原因を総括し、グループごとに貧困緩和に向けた解決策を提示するものです。

各グループの発表ごとに、参加者全員が発表の内容を確認し、それに対する疑問や意見を共有できるように、10分程度のグループディスカッションの時間を設けました。

# 4

## 開催要項

### Conference Details

### 開催スケジュール

開催日時：2016年9月10日（土）～2016年9月16日（金）

※2日間の観光日を含む。

	12th Sep (Mon)	13th Sep (Tue)	14th Sep (Wed)	15th Sep (Thu)	16th Sep (Fri)
	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast
9:00 AM	Head over to venue	Head over to venue	Head over to venue	Head over to venue	Head over to venue
10:00 AM	Introduction	Presentation on Homelessness	Workshop by Oxfam	Idea contest	Group Preparation
11:00 AM	Ice breaking	Seminar by Prof. Daniel Kilburn			Lunch*
12:00 PM	Presentation & Discussion		Lunch*	Lunch*	
1:00 PM	Lunch*	Lunch*			Workshop by Oxfam
2:00 PM	Induction		Map Exercise	Cultural Exchange & Tea Break	
3:00 PM	Fieldwork	Reflection	Seminar by Mr Neil Lee		Reflection
4:00 PM		Reflection	Reflection	Group Preparation	
5:00 PM	Reflection @ ISH	Free time	Free time		Group Preparation
6:00 PM					
7:00 PM	Dinner	Dinner	Dinner in groups & Karaoke (~11pm)	Dinner in groups	Free time
8:00 PM					Farewell Dinner

### 開催場所



宿泊施設

229 GREAT PORTLAND STREET, LONDON W1W 5PN

URL: <https://ish.org.uk/>



会議施設

13-14 Cornwall Terrace Mews, London

NW1 4QP

URL: <http://www.dajf.org.uk/>

## 講演者



### Daniel Kilburn

ダニエル・キルバーン氏はユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(ロンドン大学)の語学・国際教育センター講師です。高等教育アカデミーの准研究員も務めており、専門は住宅政策及び都市整備の社会環境への影響、高等教育における社会調査手法。キルバーン氏はロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで学士・修士・博士号を取得しました。



### Oxfam

オックスファムは世界貧困の克服を目的とする国際協力団体です。ギリシャへの物資救援をきっかけに1942年にオックスフォードにて設立され、現在は開発支援、人道支援そして調査提言を主として活動しています。世界90カ国以上で事業を展開しており、累計300億円以上の募金を集めました。今回は公衆関与に務められるカーラ・ヴィオランテ氏を招待させていただきました。



### Neil Lee

ニール・リー氏はロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの地理・環境学部助教授です。ワーク財団社会経済学センター所長を務めた経験があり、専門は都市、経済変化の社会的側面。リー氏はユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(ロンドン大学)で学士、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで修士・博士号を取得しました。



### 荻谷剛彦 (Takehiko Kariya)

荻谷剛彦氏はオックスフォード大学の社会学部教授です。東京大学の教育学部教授を務めた経験があり、専門は教育社会学、戦後日本の社会変化。荻谷氏は東京大学で学士・修士、ノースウェスタン大学で博士号を取得しました。

## 協力

- 主催 日英学生会議実行委員会・一般社団法人 Bizjapan  
後援 在日英国商工会議所  
協賛 グレイトブリテン・ササカワ財団  
株式会社 ベネッセコーポレーション

## 実行委員一覧

松崎可鈴	King's College London
石田秀	University of Oxford
石井大智	慶應義塾大学
南若葉	慶應義塾大学
柴田堯彦	早稲田大学
大谷達磨	London School of Economics and Political Science
Edward Zhang	University College London
奈須野文槻	東京大学

## 日本側参加者一覧

近谷詩織	国際基督教大学
高橋優華	横浜国立大学
高橋梨々花	東京大学
太田杏奈	横浜市立大学
田中小絵	慶應義塾大学
齋藤美咲	慶應義塾大学
直田彩加	Royal Holloway, University of London
野口奈央	University of Bradford
大矢聡美	University of Southampton

## 英国側参加者一覧

Theo Keeping	University of Oxford
Thomas Yates	University of Oxford
George Lewin-Smith	University of Oxford
Alexander Curtis	University of Oxford
Alvin Chua	University of Oxford
Neneh Kumar	University of Leeds
Beth Barker	University of Cambridge
Kaifeng Wei	Imperial College London

本会議の準備として計4回にわたる勉強会を実施し、課題図書と事前課題を課しました。最初の勉強会では、様々な軸を切り口に貧困問題を分析しました。貧困問題の現状を調査し、その原因との因果関係を分析し、社会や政府がどのような対策をすべきなのかを議論しました。その後の勉強会では、貧困を生み出す原因となっている社会の構造について論じました。企業や政府、公的機関が貧困問題において占める役割、貧困問題の政治的・経済的背景について調べるとともに、チャリティー団体、自治体、社会的企業が貧困問題に対する注意喚起と改善をもたらす可能性について論じました。

## 第1回勉強会

第1回事前学習では、貧困分野を幅広く捉えるために3つの分野に分けて学習を行いました。

Part A では、①貧困に直面している人々、②先進国における貧困、③貧困の実状について多面的に分析し、議論しました。①ではさらに、ワーキングプア、子供の貧困、機会の不平等について理解を深めました。②では、相対的貧困が主である日本において顕在化しない貧困は社会認知度が低く、その背景には一億層中流の考えが未だに残存していることを話しました。③では、親の学歴や社会的地位が子世代のそれに大きな影響を与え、貧しい家庭に生まれた子供は貧困の悪循環から抜け出すのが困難であることについて話しました。

Part B では特に関心のある貧困分野に関して各自調査したものを発表し、意見交換を行いました。

Part C では課題図書として読んだ『ルポ最底辺』、『ルポ・シングルマザーの貧困』（ちくま文庫）の内容に基づいてケーススタディを行いました。ホームレスに生活保護費を単に渡すのではなく、ボランティア活動やNPO、NGOなどの仕事を与えて公的就労の対価としてお金を渡す方が社会全体にとっても有意義であると考えました。

## 第2回勉強会

第2回勉強会では、貧困の社会的背景について、行政面と企業面で貧困にどのような影響を与えているか調べ学習を行いました。まず、行政面に関して、国民の必要最低限度の生活を保障するために政府はどこまで介入すべきか、ということに関して論議しました。日本は欧米諸国に比べて生活保護費受給の対象基準が高く、貧困線以下の8割の人が生活保護手当を受給できていませんが、高齢化に伴う社会保障費の増加に伴い、国家予算における生活保護費の割合の増加は難しいという結論に至りました。企業面では、バブル崩壊後の景気悪化やグローバル化の進展による労働市場の規制緩和、不況による企業の人件費削減により非正規雇用労働者の採用が推進されていたことをふまえ、近年非正規雇用労働者削減・正社員雇用促進のために、企業内でどのような政策が行われているかについて調査しました。

また、日本における経済政策について、成長戦略、財政政策、金融政策、所得再分配の観点から日本の貧困状況と関連づけて分析を行いました。2009年の統計では、日本は富の再分配においてOECD

諸国内で最下位であったことをふまえ、アベノミクスの金融緩和による経済成長政策が、一方で富裕層と貧困層との格差を拡大させている可能性について検討し、富を低所得層にトリクルダウンさせる方策を論議しました。

## 第3回勉強会

第3回勉強会では、過去2回の事前学習をふまえ、日本とイギリスの貧困状況を比較した後、イギリスの実状を詳しく調査しました。イギリスにおける失業率は4.9%で2005年以来最低であり、日本における失業率は3.1%と過去24年間で最低でした。しかし、失業率が低下したとはいえ、日本ではパートタイムで働く人口が全体の40%に上り、イギリスでも給料と生産性の伸び率は2%にとどまります。失業率が低下しても就業環境・条件は依然として改善されていない点が貧困を引き起こしていることがわかります。イギリスでは平均年収が上昇したにもかかわらず、1980年代以来、格差状況は変わっていません。IFSによると、イギリスにおける現在の中所得者層は過去の低所得者層と似た状況にあります。その主な理由は3つ考えられ、中所得者層の半分は借地人であり所有者が少ないこと、就業率の上昇に伴い給付金を受給できる人口が減少したこと、子供がいる中間層の家庭の30%が補助金と税額控除から収入を得ていることです。これらから就業率の上昇は全体の補助金の給付額を削減し、貧困線以下の人々にとってはかえって困難な状況になりかねないことがわかりました。

## 第4回勉強会

第4回勉強会では、各分野における貧困削減に向けてイギリスにおいて取られている政策についてまとめました。日本においては貧困撲滅運動の主体は主にNPOであるのに対し、イギリスにおいては民間のチャリティー団体が中心です。イギリスには貧困関連の多種多様なチャリティーが27000以上存在し、約13億ポンドの資金がありますが、効果には限界があります。政府、民間企業、非営利団体・チャリティー、の3つのセクター間が協力し活動目的の透明性を高めることが重要です。非営利団体・チャリティーは助けを必要としている貧困層の需要を確認し、民間企業は資金援助し、政府は非営利団体の調査に基づいて貧困層の需要に応えた政策を立案することで、それぞれのセクターの役割が補充されるだろうと話し合いました。



## 導入プレゼンテーション

12<sup>th</sup> Sep 11.15am - 1.15pm, 13<sup>th</sup> Sep 10am – 10.45am

日本側、英国側各々で4グループに分かれ、事前学習をもとに自国の貧困問題の特徴を分析し、A: 貧困問題の全貌をとらえ、文化的背景をふまえた対貧困政策の分析、B: 貧困の背景を①子供の貧困、②ホームレス、③ワーキングプア というアクターごとに分析したプレゼンを行いました。

先進国内の貧困というテーマのために、相対的貧困の観点からの議論が主体となり、貧富の格差が拡大していることが問題視されました。政府や自治体により対貧困政策が実施されているにもかかわらず、今なお貧困問題が存続している理由として、対策のターゲットがごく一部の層に限定され、最低賃金で働きつつも借金返済や家賃の支払いに追われ、貧困のループから抜け出せない層や、住所不定のために保護が受けられない層への対策が十分に想定されていないことが考察されました。

世間に貧困問題の現状理解が浸透していないことも、問題の改善が滞っている一因として挙げられました。貧困の責任が各家庭や個人にあるとされ、ジェンダーに基づく固定観念や、年齢、年収、人種による機会の不平等性といった、貧困を生み出す社会の構造的欠陥が黙認されているのが現状です。



また、雇用形態にも日本やイギリスの産業発展の歴史的背景が垣間見られます。急速な需要の拡大に続く長期的な不景気は、不定期雇用やパートタイム雇用の普及を促してきました。企業が柔軟に景気変動に対応するべくリスクを回避する結果、派遣労働という形で労働者にしわ寄せしている状況も取り上げられました。他方、子供や両親の教育のサポートサービス、雇用機会の提供や紹介、生活保護や奨学金の給付といった、政府によってすでに施行されている政策についても言及されました。

## フィールドワーク

12<sup>th</sup> Sep 2pm – 6.30pm

4班に分かれ、それぞれイズリントン、ニューハム、タワー・ハムレッツ、ストラットフォードの4地域について、ロンドンの貧困状況を分析しました。まず40分程度の時間で、班ごとに自分たちが取材する地域の貧困に関する統計データを調べ、客観的にその地域についてどういうことが言われているかを調査しました。その後、街に2時間の調査に出かけ、実地の現場調査と聞き取り調査を行い、地域の貧困のイメージと現実との一致や相違についてわかったことを記録しました。地元の人々に聞き取り調査を行うことにより、外からは明らかでない地域内の意識の格差や表面化しない貧困について学ぶこ

とができました。例えばストラットフォードは近年ロンドン・オリンピックの影響もあって開発された商業的な地域で、さらなる開発や教育の充実化も進められている一方で、未だ売春や犯罪率が高いエリアも存在するということがインタビューからわかりました。タワー・ハムレッツでは、ギャンブル店や質屋が多く見受けられ、道路のごみや壁の落書き、シャッター街、修繕されない家屋が目立ちました。またニューハムでは、地域内の貧富の格差や人種間の隔たり、家屋の修繕状況の悪化が明らかにされる一方で、地元の人々が居住地の負の側面を語りたがらない節が見受けられました。

フィールドワーク後に1時間程度の時間を設け、班ごとの体験を全体で共有しました。



## Daniel Kilburn 博士によるセミナー

13<sup>th</sup> Sep 10.45am - 1.30pm

University College London の地理学部にて教鞭を執る Dr Daniel Kilburn を招き、1時間程度のレクチャー及び2時間以上に及ぶインタラクティブなセミナーを開きました。キルバーン博士の関心領域は都市形成過程における人と空間の関係性、住宅政策など多岐に渡ります。‘The Housing Problem: Geographies of poverty and provision’ と題した今回の講演では、ロンドンにおける住宅の供給状況と加速する都市化について、統計データなどを用いて多角的な分析がなされました。

セミナーでは、ジェントリフィケーションと地価・家賃の急上昇がキーコンセプトとして取り上げられました。ジェントリフィケーションは貧困地域に比較的豊かな人々が流入し、地域が高級化される現象であり、往々にして生活水準の上昇を促す一方で、貧困層の追い出し現象を生みます。土地投資による地価の上昇や、都市の過密化を前に、ロンドンが国際都市として今後どのような方針をとるべきかが



議論されました。ディスカッションでは、日本では土地や住宅への投資が国内中心であるのに対し、ロンドンでは外国からの投資が盛んであることなどが注目され、政府による介入や住宅政策の再考が提案されました。また、日本とイギリスとで都市の過密度や交通の発達事情、住宅に求められるスタンダードの違いなどが、両国の土地利用に特徴的な違いを生んでいることが明らかになりました。

参加者からは、会議の開催地でもあるロンドンを

ベースとした最新の研究内容に触れ、議論をすることで国際都市ロンドンの新しい側面を発見したという声がありました。また、ロンドンにおける固有の事情を理解することを通して、日英間における貧困の現れ方の違いを見出せたようです。例えば、イギリスではネオリベラリズムの影響から、政府の市場介入への抵抗が大きいこと、自宅の所有権が強いイデオロギーとして存在すること、それらの結果として土地価格が適正価格に調節されないという現状があります。セミナー後も参加者同士で熱く解決策を議論する様子が見受けられました。

## マップ・エクササイズ

13<sup>th</sup> Sep 10.45am - 1.30pm

ジェントリフィケーションが顕著に見られる、東ロンドンのショーディッチ地区の地図を用意し、その地区における様々な統計データをもとに分析を行いました。犯罪件数、教育格差、人種配分、信仰の多様性などが調べられる DataShine、時代ごとの地図から土地利用の変遷がわかる Digimap などのオンラインリソースを利用し、ショーディッチ地区が実際にどのような地域なのかを小グループで議論し、まとめました。例えば、局地的に犯罪が多い通りなどを発見すると、「なぜその場所だけ犯罪発生率が高いのか」などと問いを立て、他のデータと照合しつつ、仮説を検証していきました。チームごとにまとめたレポートでは、同じ地区を分析したにも関わらず、多角的な切り口から分析がなされており、参加者各々の個性的なバックグラウンドが視点の固有性を発揮したエクササイズとなりました。



## Oxfam によるワークショップ

14<sup>th</sup> Sep 10am - 2.45pm

世界貧困の克服を目的とする国際協力団体 Oxfam によるワークショップを行いました。貧困そして Oxfam の活動に関するプレゼンに続き、参加者による新規プロジェクトのアイデアプレゼン、そして賛成・反対アクティビティを行うという構成でした。

講義の前半は対話形式で行われ、貧困の定義やその原因に関する意見交換がなされました。ディスカッションは貧困問題に関する政府の干渉の度合いにまで発展し、Oxfam のような民間セクターと地域共同体が連携することによる貧困解決の展望が話し合われました。後半は貧困解決のための Oxfam の活動の説明がありました。Oxfam が貧困問題への注意喚起と資金調達をする工夫として実施している、スポーツやお祭りイベントや、リサイクルショップの運営、貧困のサイクルから抜け出す支援としての職業訓練ワークショップや教育プログラムなど、地域と連携した取り組みについて学びました。Oxfam が目指す目標の代表的なものとして、貧富の格差の縮小、雇用機会へのアクセス、女性の社会進出が挙げられます。このようなワークショップやキャンペーンを通して、個人の力では変えられないことを、地

域やコミュニティ規模で変えていくことができるという実例を知ることができました。

午後には、賛成・反対アクティビティが実施されました。これは貧困に関わるディベートトピックに対して、生徒が賛成あるいは反対の立場を選ぶもので、テーマは貧困の原因から哲学的問いなどと多岐に渡りました。テーマごとに生徒は自分の視点を裏付けるための意見交換を行いました。また、参加者内の小グループで、自分たちが Oxfam のもつリソースを活かしてどのような新規プロジェクトを興せるかというアイデアを議論し、発表しました。

会議の休憩時間中にも、参加者間で、価格競争ゆえに低賃金雇用を生み出す、消費社会の構造的欠陥にどのように対処するか、消費者の態度を変えることは可能なのか、といった点が熱く議論されている様子が見受けられました。



## Neil Lee 博士によるレクチャー

14<sup>th</sup> Sep 3.15pm - 4.15pm

London School of Economics and Political Science の Dr. Neil Lee より、Inclusive Growth（包括的な成長）に関する分析、および都市部における格差についてレクチャーいただきました。リー准教授は最初に世界規模で人々の格差が広がっていることを指摘し、各国家は自国の経済発展の恩恵をより広く平等に社会全体に行き渡らせる必要がある、と論議しました。トリクルダウンによる波及的な経済効果に期待するあまり、成長戦略中心の政策が推し進められ、富の再分配の重要性が過小評価されてきた現状に警鐘を鳴らしました。また、リー准教授はワーキングプアについても言及し、日英の貧困層の生活レベルを上げるためには、国や社会がより「質」の高い職を作る必要があると主張しました。最後に、将来的な経済発展・人々の生活レベルの向上のためには、国の教育および人材育成が必要不可欠な要素であると語り、講義を終えました。

1 時間という短い時間のなかに主要な論点が凝縮された密度の濃い講義でした。10 分ほどの質疑応答では学生たちが活発的に質問を投げかけていました。例えば、英国・日本での「包括的な成長」戦略の実用性や、富の再分配と格差縮小のために効果的な政策について質問が上がりました。

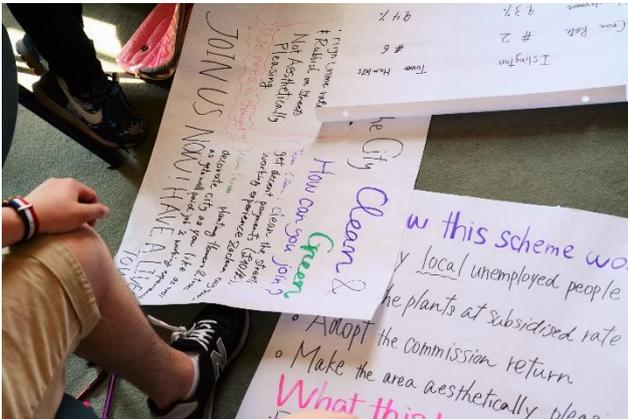


## アイデアコンテスト

15<sup>th</sup> Sep 10am – 1.15pm

ロンドンの具体的な地域を実施対象とした貧困解決の取り組みのアイデアを 1 時間半かけて考案

し、模造紙によるプレゼンでグループごとにピッチするというコンテスト形式のプレゼンを行いました。1日目のフィールドワークで訪問した地域が異なる参加者同士を取り合わせ、実地調査や地元の人々へのインタビュー経験がアイデアを構成する素材となることを意図しました。また、2日目のマップ・エクササイズで紹介したデータベースをアイデアの現実性を検証することに利用しました。



A班は、ニューハム区におけるヒンドゥーやムスリムと白人との交流が盛んでないことに問題提起し、幼少期体験として学校が自分の所属コミュニティを規定することに着目しました。学校のコミュニティを超えた相互理解の取り組みとして、地域の教員を動員して多様な宗教理解のための小学校教育を施すとともに、他校とのスポーツなどの共同イベント開催により、国籍や人種を超えた交流を生み出すアイデアが提案されました。

B班は、日本における対貧困政策に基づいたアイデアとして、1都道府県におけるジョブカフェの数を増やすこと、奨学金返済の利率を低くすることで学費を払えない学生の負担を減らすこと、通塾できない子供の放課後学習をサポートするボランティアの促進を提案しました。イギリスにおいては、多人数コミュニティにおいて他人種間の交流を促進することで孤立を防ぐこと、定期的な地域の清掃を心がけることで地域活性化の基盤を築くことを考案しました。

C班は、ニューアム区の人口の大半が移民一世であり、その多くが英語力不足により職にアクセスしにくい現状に着目しました。この言語の壁を解決すべく、放課後の英語コースを提案しました。既存の学校を使用するため施設費がかからないこと、そして英語堪能な移民を講師として採用することが特徴です。このアイデアは移民にとって、語学研修の場になると同時に、職の場にもなるでしょう。

D班は、タワー・ハムレッツにおいて地域のさびれやごみ・落書きによる景観の悪さが地域のブランドイメージを低下させ、観光やその他の商業活動に弊害をもたらしていることに着目しました。地域活性化の取り組みとして、有給の清掃活動とともに道路沿いに花壇を作って手入れをする園芸活動を実施することを提案しました。失業者が雇用の機会を得て身を立て直す踏み台としても活用されることへの期待が込められました。

アイデアの実現可能性と必要性が評価され、D班のアイデアが人気投票を得ました。



## 文化交流会

15<sup>th</sup> Sep 1.15pm – 4.30pm

良い天気にも恵まれた 15 日にはリージェンツパークでお寿司やおにぎりを食べながらピクニックをした後、日本とイギリスの昔遊びを交互に行いました。青空の下、皆で身体を動かすことで会議中の緊張感がほぐけ、参加者はより親睦を深めることができました。その後、屋内に戻り、書道、うちわ作り、折り紙などを体験し、緑茶と日本の和菓子を味わいました。イギリス側参加者にとって日本の魅力を垣間みる良い機会となったようです。



## 最終プレゼンテーション

16<sup>th</sup> Sep 10am – 3.30pm



会議の最終日には、日英の混合グループにより、日英の貧困問題の現状と解決策を論ずる 4 つのプレゼンがなされました。事前学習およびセミナー、ワークショップ、フィールドワークを通して得た、先進国における貧困問題に対する知見を踏まえ、各々独自の切り口から地域レベル、そして国家レベルでの両国の貧困解決の展望を探りました。多くのグループが母子家庭の貧困問題や住宅問題を具体的な貧困問題の事例として取り上げていました。

発表後には、University of Oxford の苺谷教授より講評をいただきました。苺谷教授は日英学生会議の指針を高く評価されるとともに、社会政策において考慮すべき、統計では現れにくい世代を超えた貧困の理由や、高齢化社会における貧困問題といった別の観点からの現代社会の解析を提案されました。苺谷教授はまた、この会議を通しての異文化交流が、相手の国についての学びであるだけでなく、相手の国との比較の過程で映し出される自国の姿を知ることでもあり、両国の現在を知るだけでなく、歴史を分析することが両国の将来についての貴重な知見をもたらすだろうと述べられました。

## 参加者の声

(日英学生会議は) 私にとって新しい人々と出会い、異文化を知り、近代の重要な課題についての見解を広げる機会でした。ディスカッションはとても刺激的で、日本文化は非常に興味深く、全体的に有意義に感じました。

— トム・イエーツ、オックスフォード大学生

この会議で出会った人々との関係は生涯大切にしていきたいと思っています。この会議は貧困に関する知識、そして日本やイギリスのような国のこの課題との向き合い方への見解を深めさせてくれました。

— 高橋梨々花、東京大学生



## 謝辞

日英学生会議の開催にあたり、ご登壇いただいた Dr Kilburn, Ms Violante, Dr Lee, Dr Kariya、協賛していただいたベネッセコーポレーション、助成していただいたグレートブリテン・ササカワ財団、後援していただいた大和在日英国商工会議所、会議施設を提供していただいた大和日英基金、宿泊施設を提供していただいた International Students House をはじめ、多くの方々にご支援・ご協力いただきました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

— 日英学生会議実行委員一同